

### 第三章 柏木の物語 夕霧の見舞いと死去

[第一段 柏木、権大納言となる]

かの衛門督は、かかる御事を聞きたまふに、いとど消え入るやうにしたまひて、むげに頼む方少なうなりたまひにたり(あの衛門督はこの姫宮の御出家をお聞きになると、ますます意気消沈しなさってどうにも回復の見込みが少ない容態にお成りでした)。

女宮のあはれにおぼえたまへば(夫人の女二の宮を後に残す事が不憫に思われなさって)、ここに渡りたまはむことは(この大臣邸に見舞いにお越しなさることは)、今さらに軽々しきやうにもあらむを(今さらに未練がましく宮家の格に相応しくないことのようにもありそうなのを)、上も大臣も(うへもおとども、母上も父大臣も)、かくつと添ひおはすれば(このようにずっと看病に付き添いなさっていらっしゃるので)、おのづから\*とりはづして見たてまつりたまふやうもあらむに(その日常性のままに、どうしても礼を失した形でお会い申しなさってしまうことになりかねないので)、あぢきなしと思して(宮にお越し頂くのは不都合にお思いになって)、 \*「とりはづす(取り外す)」はくうっかり取り違える→粗相をする>。「見たてまつりたまふ」の主語は「上も大臣も」で<両親が宮にお会い申しなさる>。普段着で公式の場に出てしまう無作法、のようなことだろうか。臣下身分の家として、宮家を丁重に迎えなければならない、という社会規範を管理者たる藤原家が「取り外す」ことがあってはならない、という惣領の思いだろうか。此処の文意はとても分かり難く、このことが社会的に重要なことだとする認識または生活感を汲むべきなのか、此処で作者が特に是を言う意図に手応えが無く、しかし何か書いてある以上は、何かしらその意味を押さえるべく、一応そう読んで置く。

「かの宮に、とかくして今一度参うでむ(あちらの宮邸に、ともかくもう一度伺いたい)」

とのたまふを(と衛門督が仰るのを)、さらに許しきこえたまはず(御両親は決してお許し申しなさいません)。\*誰にも(両親初め弟たちみんなにも)、この宮の御ことを聞こえつけたまふ(衛門督はこの宮の御世話を願い申し置きなさいます)。 \*「たれにも」はくみんなに>だが、今の状態で藤君が会えるのは両親と弟たちだけだ。

はじめより母御息所は(初めから宮の母御息所は)、をさをさ心ゆきたまはざりしを(この結婚に、少しも気が向いていらっしゃらなかったのを)、この大臣の居立ちねむごろに聞こえたまひて(藤原殿がこまごまと熱心に手を尽くし申しなさって)、心ざし深かりしに負けたまひて(その熱意に負けなさって)、院にも(父朱雀院におかれても)、\*いかがはせむと思し許しけるを(特に問題はないだろうとお思いになってお許しがあつたのだが)、\*二品の宮の御こと思ほし乱れけるついでに(女三の宮の不幸な御結婚生活をお思いになって心乱れた時には)、 \*「いかがはせむ」はくどうしたものか→他に手立てがあるだろうか→特に妙案はない→それで良いだろう>くらいの語感。 \*「にほんのみやのおんこと」はく女三の宮の不幸な御夫婦仲>。

「なかなか、この宮は行く先うしろやすく(却って女二の宮のほうが先行き安心で)、まめやかなる後見まうけたまへり(良い夫を得なされたものだ)」

と、のたまはずと聞きたまひしを(と仰せだとお聞きになったのを)、かたじけなう思ひ出づ(身に余る光栄だったと思ひ出します)。

「かくて(このように先立って)、見捨てたてまつりぬるなめりと思ふにつけては(宮をお見捨て申してしまうようになると思えば)、さまざまにいとほしけれど(いろいろと心残りだが)、心よりほかなる命なれば(寿命は天命なれば)、\*堪へぬ契り恨めしうて(妻を養う夫の責任を全う出来ない夫婦縁が残念で)、思し嘆かれむが(宮が嘆きなさるだろうことが)、心苦しきこと(気掛かりです)。御心ざしありて訪らひものせさせたまへ(どうか御配慮を持って援助なさって下さい)」\*「堪へぬ契り」の「堪へぬ」は動詞「堪ふ」の未然形に打消しの助動詞「ず」が付いたものの連体形で、「契り」は<夫婦の宿縁>。で、「堪ふ」は<辛抱する、持ちこたえる>の他に<能力がある、価値がある>の意があると大辞泉にあり、此处では<能力がある→養える>ということなのだろう。

と、母上にも聞こえたまふ(と衛門督は母上にも願い申しなさいます)。

「いで、あなゆゆし(まあ何と不吉な)。後れたてまつりては(あなたに先立たれては)、いくばく世に経べき身とて(そのあとどれほど生き永らえられる身と私を思って)、かうまで行く先のことをばのたまふ(そのように先のことを仰いますのか)」

とて(と言って母上は)、泣きにのみ泣きたまへば(ただただお泣きなさるので)、え聞こえやりたまはず(衛門督はとてもお頼み置き申し上げる事がお出来になりません)。\*右大弁の君にぞ(そこで弟の右大弁君に)、大方の事どもは詳しう聞こえたまふ(大体のことは詳しくお話しなさいます)。\*「右大弁の君」は<柏木の弟。もし次弟と考えれば、「若菜下」巻に「左大弁」とあった人物と同一人となり、いずれかに誤写があろう。>と注にある。若菜下巻八章三段でも昨年のことだが、葵祭の後祭見物に同道したと名前が出ただけで手掛かりは無い。

心ばへののどかによくおはしつる君なれば(衛門督は気性が穏やかで仲良くしていた兄弟なので)、弟の君たちも(弟君たちも)、まだ末々の若きは、親とのみ頼みきこえたまへるに(まだ末の弟の幼い者などは親のように慕い申しなさっているのに)、かう心細うのたまふを、悲しと思はぬ人なく(こう心細く仰るのを悲しく思わぬ者は無く)、殿のうちの人も嘆く(奉公人たちも嘆きます)。

公も(おほやけも、帝も)、惜しみ口惜しがらせたまふ(衛門督を惜しんで残念に御思ひあそばします)。かく限りと聞こし召して(このような重態とお聞きあそばして)、にはかに\*権大納言になさせたまへり(にわかには権大納言に任命為さいます)。よろこびに思ひ起こして(喜びに奮起して)、今一度も参りたまふやうもやあると(今一度出仕なさる事もあるかと)、思しのたまはせけれど(お考えになって仰せになったが)、さらにえためらひやりたまはで(一向に回復なさらず)、苦しきなかにも(病床にあって)、かしこまり申したまふ(拝命を謹んでお受けなさいます)。大臣も(おとども、父大臣も)、かく重き御おぼえを見たまふにつけても(衛門督が帝に斯くも重い御信任あるをお知りなさい)、いよいよ悲しうあたらしと思し惑ふ(長男の重篤をますます悲しく惜しいことと思ひ惑いなさいます)。\*「権大納言(ごんだいなごん)」は定員外の特命議長みたいな感じ、ら

しい。特命は帝が臨時に任命するようで、権限の無い名誉職の場合がほとんどなのだろうが、直命で非常に権限が強い場合も有り得る訳で、如何にも政治任用だ。

## [第二段 夕霧、柏木を見舞う]

大将の君(近衛大将の源君は)、常にいと深く思ひ嘆き(常に衛門督藤君の病状をととても深く思ひ嘆いて)、訪らひきこえたまふ(お見舞い申し上げていらっしゃいます)。御喜びにもまづ参うでたまへり(この度の御昇進にも直ぐお祝いに駆け付け申しなさいませう)。

このおはする対のほり(衛門督が療養していらっしゃる対屋周辺は)、こなたの御門は(門前には)、\*馬、車たち込み(見舞いとお祝いの同僚武官の馬や高官の車が立て込んで)、人騒がしう騒ぎ満ちたり(従者や応対の家人たちが騒がしく多くの人で溢れていました)。\*「むまくるまたちこみ」は<「馬」は身分低い者の乗り物。「車」は高い者の乗り物。>と注にある。

今年となりては(今年になってからは)、起き上がることもをさをさしたまはねば(衛門督は起き上がることも滅多に為さらないので)、\*重々しき御さまに(源君の威儀を正した参議姿に)、乱れながらは(病床の寝姿で)、え対面したまはで(とても面会できなされないといつて)、思ひつつ弱りぬること(会いたいと思ひながら会えずじまいになってしまう)、と思ふに口惜しければ(と思ふに残念なので)、\*「重々しき御さま」は<夕霧の「大将」という身分の重さをいう。>と注にある。近衛大将も衛門督も武官の長だが、同時に参議大納言という高い地位と身分であつて、正装は三位以上の黒い袍だったらしい。公式の昇進祝だから、正装で臨んだ。それが「重々しき御さま」なのだろう。

「なほ(さらに)、こなたに入らせたまへ(こちらへお入り下さい)。いとらうがはしきさまにはべる罪は(ひどくだらしない格好で居ります罪は)、おのづから思ひ許されなむ(どうかご容赦下さい)」

とて、臥したまへる枕上の方に(といつて横になつていらっしゃる枕元の上座に)、僧などしばし出だしたまひて(僧などを暫く部屋の外に出しなさいませう)、入れたてまつりたまふ(源君をお入れ申し上げなさいませう)。

早うより(幼い時から)、いささか隔てたまふことなう(少しも分け隔てなさること無く)、睦び交はしたまふ御仲なれば(親しく交わつていらした御仲なので)、別れむことの悲しう恋しかるべき嘆き(死別を悲しみ惜しみなさる大将の嘆きは)、親兄弟の御思ひにも劣らず(親兄弟の御思ひにも劣りません)。今日は喜びとて(今日はお祝いなので)、心地よげならましをと思ふに(藤君が元気だったらと思ふに)、いと口惜しう(とても悔しく)、かひなし(悲しい)。

「などかく頼もしげなくはなりたまひにける(どうしてこんなにお弱りになつてしまわれた)。今日は、かかる御喜びに、いささかすくよかにもやとこそ思ひはべりつれ(今日は昇進に気を良くなさつて幾らかは持ち直していらっしゃるかと思つておりましたが)」

とて(と言つて源君が)、几帳のつま引き上げたまへれば(几帳の布端を引き上げなさいませう藤君の様子を御覧になると)、

「いと口惜しう(本当に悔しいが)、その人にもあらずなりにてはべりや(前の自分ではなくなってしまうよ)」

とて(と言って藤君は)、\*烏帽子ばかりおし入れて(せめて烏帽子だけは被らないと失礼だろうと髪を押し入れて)、すこし起き上がらむとしたまへど(少し起き上がろうとしなさったが)、いと苦しげなり(とても辛そうです)。 \*「烏帽子ばかりおし入れて」は注に<『完訳』は「烏帽子をとらぬのが、当時の礼儀。髪を押し入れるべくかぶる」と注す。源氏物語絵巻「柏木」第二段、参照。>とある。

白き衣どもの(しろききぬどもの、白い着物の)、なつかしうなよよかなるをあまた重ねて(馴染んだ柔らかそうなものを何枚も重ね着して)、\*衾ひきかけて臥したまへり(掛け布団を掛けて横になっていらっしやいました)。 \*「衾(ふすま)」は<布などで長方形に作り、寝るときにからだに掛ける夜具。綿を入れるのを普通とするが、袖や襟を加えたものもある。現在の掛け布団にあたる。>と大辞泉にある。「衾」は「同衾(どうきん、男女の共寝)」の「きん」だ。

\*御座のあたりものきよげに(御病床の周りは整理整頓されていて)、けはひ香うばしう(香が漂い)、心にくくぞ住みなしたまへる(小ざれいになさっていらっしやいます)。 \*「御座(おまし)」は主人の座所という言い方だが、此处では藤君の御病床ということだろう。

うちとけながら(安静にしながらも)、用意ありと見ゆ(身だしなみへの気配りは在るようです)。重く患ひたる人は(重病人は)、おのづから髪髭も乱れ(どうしても髪やひげの手入れがおろそかで)、ものむつかしきけはひも添ふわざなるを(むさくるしいようすになりがちだが)、瘦せさらぼひたるしも(瘦せこけてはいても)、いよいよ白うあてなるさまして(ますます白く上品な感じで)、\*枕をそばだてて(枕で耳をそばだてて)、ものなど聞こえたまふけはひ(話をお聞きになる姿は)、いと弱げに、息も絶えつつ、あはれげなり(とても弱々しく息も絶え絶えで何ともはかなげです)。 \*「枕をそばだつ」は<枕を傾け、耳を澄まして聞く>と古語辞典にある。また、「そばだつ」は<高くそびえ立つ>ともある。が、何のことか分からない。「耳をそばだたせる」なら「耳を側立たせる」で<聞き耳を立てる>という意味だろうと思っていたが、「そばだてる」は「敬てる」と表記されるようで、「耳をそばだてる」は行為ではなく<耳をピンと立たせる＝聞き耳を立てる>という意識集中自体を示す言い方であり、「側立てる」は私の勘違いだったようだ。ところで、「そばだてる」は古語の「そばだつ」のこと、と辞書にあるので、即ち「枕をそばだつ」は<枕をそばだてる>と言い換えることで、現代語文の<横になったまま聞き耳を立てる>という意味になって、何の事は無い、現代語とされる「そばだてる」という語の意味を私が知らなかっただけのこと、だったというワケだ。確かに、そう言われてみれば、「枕を傾ける」という言い方には<横になったまま聞き耳を立てる>という意味の語感がある、ような気がしてくる。いやしかし、ちょっと待て。是は「そばだてる」の語源が「そばだつ」だ、という説明を聞いただけのことで、改めて「そばだつ」という語が<意識を集中させる>という語感だと認識してみると、鹿やウサギや犬やその他の動物たちが<耳をピンと立てる>姿を注意力の表情として絵面に想像することは出来るし、実感としては<刺々しく鳥肌が立つ>とさえ言えそうで、これはまた「そびえる」を<脅える>と私が勘違いしているのかも知れないが、ともかく「そばだつ」は和語として<危機感を覚える>という即物的な音感であって、辞典にある<高くそびえる>という形容描写の語意は、どうも漢語の理屈っぽさが立っている説明に思えてならない。となると、「敬(き)」という漢字の意味が問題になりそうだ。で、「そばだつ」を辞書検索するのではなく、「枕をそばだつ」をWeb検索すると、この言い回しが白居易の「全唐詩」などに収められた「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」と題された五首連作の第四首八行詩の中にある第三句「遺愛寺鐘敬枕聴」から引かれたものだという解説が「古典文

学探索研究」サイトの「源氏物語探索」コーナーの「枕をそばだつ」トピックに、諸注にある当然の指摘として、その上での考察という形で記されている。ということは、此処の校訂文に注が無いのは、少し不親切かも、など思ったりもする。ただ、その黒須重彦氏による考察では、この「枕をそばだつ」という言い回しはく適わぬ恭順の意の詩情>みたいなことらしいが、其処までの深読みは私の知見を越えている。ともあれ、「遺愛寺鐘敬枕聴」を音読みすれば「イ・アイ・ジ・ショウ・キ・チン・チョウ」で、特に「キ・チン・チョウ」が八行詩第三句の起承転結の小転として響くように幾分か刺激的な言い回しとして韻作されたものではありそうだ。既にこの項でも「枕を傾ける」をく横になったまま聞き耳を立てる>という意味に理解しているので、今さらではあるが、この「枕」はく横になったまま>と読めるので、「敬枕聴」を「枕をそばだてて聴く」とする訓読みが幾分か舌足らずなのであって、是は「枕で(耳を)そばだてて聴く」と読むべきだ。

### [第三段 柏木、夕霧に遺言]

「久しう患ひたまへるほどよりは(長患いなさっている割には)、ことにいたうもそこなはれたまはざりけり(とくにひどくやつれてはいらっしゃらないようですね)。常の御容貌よりも(いつものお顔立ちよりも)、なかなかまさりてなむ見えたまふ(却って好い男ぶりですよ)」

とのたまふものから(と仰りながらも)、涙おし拭ひて(源君は涙を押し拭って)、

「後れ先立つ隔てなくとこそ契りきこえしか(後先の違いなく共に死すべしと約束したではありませんか)。いみじうもあるかな(先立つとしたら、勝手に過ぎますよ)。この御心地のさまを(こうしたご病状を)、何事にて重りたまふとだに(どうしてこれほどに重くなりなされたのか)、え聞き分きはべらず(その訳を私は聞いておりません)。かく親しきほどながら(この親しい間柄ながら)、おぼつかなくのみ(友達甲斐も無く、頼りないばかりです)」

などのたまふに(と仰ると)、

「心には(自分では)、重くなるけぢめもおぼえはべらず(此処まで重くなる変異に気付きませんでした)。そこどころと苦しきこともなければ(何処が悪いということも無しに)、たちまちにかうも思ひたまへざりしほどに(急にこのように思っても見なかったほどに)、月日も経で弱りはべりにければ(短い期間で弱ってしまいましたので)、今はうつし心も失せたるやうになむ(今では気力も失せてしまったような状態です)。

惜しげなき身を(こうなってしまつては、惜しくもないこの身が)、さまざまに\*ひき留めらるる祈り、願などの力にや(さまざまにこの世に引き留められる呪文や願文などの霊力によるものだろうか)、さすがに\*かかづらふも(それらによって生き永らえるのも)、なかなか苦しうはべれば(却って辛いので)、\*心もてなむ(気持としては)、急ぎ立つ心地しはべる(死に急ぎたくなります)。 \*「ひきとどめらるる」は「引き留む」の未然形+「らる」の連体形。「引き留む」はく引き止める>という他動詞。「らる」はくなされる、られる>という受身を示す助動詞。他動詞+受身で、作用を受ける対象から見て、その作用の意味は自動詞化する。此処での作用対象は「惜しげなき身」であり、それが対象体であることを示す格助詞「を」はくが>と主体を示す言い方になる。 \*「かかづらふ」はくこの世に繋がる>という意味でく生き永らえる>という言い方になるらしい。 \*「心もて」はく心以て=心に於いて=気持では>。「なむ」は強調の係助詞で、「心もてなむ」はく気持としては>。「心地しはべる」はくそういう気になる=そうしたくなる>。

さるは(しかし)、この世の別れ(死んでしまうとなると)、避りがたきことは(捨て難いことは)、いと多うなむ(多くあるものです)。親にも仕うまつりさして(親孝行も出来ず)、今さらに御心どもを悩まし(今となつては御心配を掛け)、君に仕うまつることも半ばのほどにて(主君にお仕え申すことも中途半端で)、身を顧みる方(過去を振り返れば)、はた(他にも)、ましてはかばかしからぬ恨みを留めつる大方の嘆きをば(さらに至らない反省点を残したままにするという全般の無念さについては)、さるものにて(別にしても)。

また心の内に思ひたまへ乱るることのはべるを(特に内心気にしております悩み事がありますのを)、かかる今はのきざみにて(斯かる今際のこの時に)、何かは漏らすべきと思ひはべれど(どうして漏らして良いものかとは存じますが)、なほ忍びがたきことを(それでも自分の胸に収め切れないことを)、誰にかは愁へはべらむ(あなた以外の誰に訴えられましょう)。

これかれあまたものすれど(誰彼と兄弟は数多く居ますが)、さまざまなることにて(彼らの立場では手に負えない、さまざまな事情がある事柄なので)、さらにかすめはべらむも(ほんの少しを仄めかすことすら)、あいなしかし(出来たものではないのです)。

六条の院に\*いささかなる事の違ひ目ありて(六条院殿と些か事の行き違いがあつて)、月ごろ(ここ幾月と)、心の内にかしこまり申すことなむはべりしを(心中恐縮申すことがあつたのですが)、いと\*本意なう(まことに意外ながら)、世の中心細う思ひなりて(世の中を悲観して思うようになって)、\*病づきぬとおぼえはべしに(それに捉われて気落ちしていた時に)、召しありて(お呼びがあつて)、院の御賀の樂所の試みの日参りて(朱雀院の五十賀の樂所の試樂の日に伺つて)、御けしきを賜はりしに(お顔色を拝見申しましたところ)、なほ許されぬ御心ばへあるさまに(まだお許しの無いお考えのような)、御目尻を見たてまつりはべりて(厳しい御目尻を拝見申し上げて)、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて(ますます世に永らえるのが差し障りが多く存じられまして)、あぢきなう思ひたまへしに(困つたことと思つた時から)、心の騒ぎそめて(動揺が始まり)、かく静まらずなりぬるになむ(このように収まらないことになってしまったのです)。 \*「いささかなる事の違ひ目」は、勿論、密通の罪深さを誤魔化した言い方ではあるが、朱雀院に女三の宮の嬪候補として認められた者としては、最後の詰めである‘婚姻’は<一寸した行き違い>に過ぎない、と言いたい気持はあるだろうし、言う資格がある、と思ひ込む藤原宗家の事情はあつたのだろう。此処の藤君の発言は都合の良い言い方はしているのだろうが、少なくとも本人としては真実を、客観的にも嘘の無い打ち明け話をしている、かと思う。 \*「本意無し(ほいなし)」は、具体的な事柄について<期待外れだ>という場合と、一般的な言い回しとして<意外にも、残念ながら>という場合があるようで、此処での表意は後者なのだろう。が、裏意には姫宮の歡心を克ち取れなかつた無念さが、少なくとも読者には滲んで見える。 \*「やまひづく」は<病気になる、病気がちになる>でもあるだろうが、此処では現代語の「病み付き(ある物事に捉われて、それ一辺倒になる)」に通じる語用に思える。

人数には思し入れざりけめど(私など物の数には御思い頂けなかつたでしょうが)、いはけなうはべし時より(幼くしておりました時から)、深く頼み申す心のはべりしを(深く六条殿を御信頼申す気持がございまして)、いかなる\*讒言などのありけるにかと(何か悪く言う者でもあつたのかと)、これなむ(この六条殿の不審が)、この世の愁へにて残りはべるべければ(この世の気掛かりとして残るようですので)、\*論なうかの後の世の妨げにもやと思ひたまふるを(当然に来世に

災いするかと存じられますので)、ことのついでにはべらば(何かの折に)、御耳留めて(この私の言葉を御覚え頂いて置いて)、よろしう明らめ申させたまへ(衷心に偽りの無きことを、あなたから六条殿にぜひ確かだとお申し上げ下さい)。 \*「讒言(ざうげん)」は「ざんげん」の音変化とのことで<事実を曲げて人を悪く言うこと。告げ口。中傷。>と古語辞典にある。とは言え、密通の露頭は藤君の手紙を宮の不注意で源氏殿に見つけられてしまったことにあるので、誰かに悪口を言われた、ということが源氏殿の不興を買う原因で無いことは藤君自身も十分承知している。だからこそ、逃げ場が無い、救いが無い訳だが、かといって、そのありのままを源君に打ち明けるのは、さすがに宮の手前からも、自分の恥ずかしさからも、殿への非礼になることから、とても口には出来ない。つまり、いくら源君に経緯を説明すると言っても、やはり決して密通のことは明かせない。と言って、この期に及んで源君に嘘を言っても始まらない。もし、後で嘘と分かれば、藤君自身が薄っぺらい印象になって値が下がる。だから、藤君はある程度の線で説明を曖昧のままに終えるしか無い訳で、その線を示すのがこの「讒言」という語用だ。誰かが藤君を悪く言った、とすれば、それを言ったのは手紙を書いた藤君自身であり、密告に値するのは手紙を隠す細心を怠った宮の不注意なのだが、この場合、誰が何を言ったかは核心ではない。その話し手の藤君の意図は聞き手の源君にも伝わっている。仮に、例えば誰かが源氏殿に藤君の悪口を言ったとする。その内容はともかく、源氏殿はその悪口によって藤君に何らかの疑念を抱く。そのような思わしくない事情があった、ということの説明するのが、この「讒言」という語だ。そして、その不興を買ったまま、藤君は源氏殿と面会する機会を得たが、その疑念を払拭することは出来なかった。そして、藤君が源氏殿の信頼を取り戻せなかったのは、その疑念が事実として殿を裏切るものであったから、なのではなく、藤君が既に体調不良に陥っていて十分な説明を行なうことが出来なかったから、という言い方を藤君は源君にしている訳だ。実際には、殿の信頼を取り戻せなかったのは、密通が事実であり、宮が藤君の子まで産んでしまったからなのだが、その問い自体を不問に付す、という言い方で藤君は、源氏殿との間に問題があった、ことの一応の説明を源君に伝えた訳だ。ただし、こんな曖昧説明では源君は事態を正しく認識できない。では、藤君は源君に何を期待して、こうした経緯を話したのか。布石だ。今が今、源君に何かが出来る訳ではない。いや、むしろ密通をはっきりと知ったら、源君の立場としてまずは藤君を非難しない訳には行かない。その上、是と言って理想的な立ち回り方がある訳でもない。誰にとっても、全ては時が解決してくれるのを待つ他無い事態だ。藤君は、密通に及ぶ時には、それを望んだ訳ではないだろうが、場合によっては源氏殿との絶縁に至る事態にも責任を取る覚悟を持った筈だ。しかし、今となつては、子を託す立場となってしまった以上、せめて六条殿との絶縁だけは避けたい、というのが本意だろう。そのために、結果として源氏殿を裏切ったが、そしてその罪の重さに押し潰されたが、密通に及んだのは殿への背信を企てたのではなく、あくまでも自分の本懐からだった、と何時か、何らかの形で、源君から源氏殿へ伝えて貰いたく、また源君自身にもその心情を汲んで貰いたく、病を圧して渾身の打ち明け話をしたのであり、その姿を見せる事が今出来ることの全てだった、のだろう。この「讒言」という語用をした作者には、外来語を便利に使う島国日本の文化人を見る思い、みたいな気もしないではないが、違う視点での新しい知識を獲得することは豊かな知見を得たものと素直に感謝すべきかも知れない。 \*「論なう(ろなう)」は「論無く」のウ音便で<言うまでも無く、勿論>と古語辞典にある。

亡からむ後ろにも(私が死んだ後にでも)、この\*勘事許されたらむなむ(この不審が解かれるとしたなら)、御徳にはべるべき(あなたの御蔭ということでございましょう)」 \*「勘事」は「かんじ」が発音使用されて「かうじ」と読む、とのことで<不興を買って退けられること。勘当。>と古語辞典にある。勘定が合わなくて勘に障る、ということだとすれば、勘に障る、ということは、もともとは曖昧な不快感ではなく規律違反に気付くという具体事例を示す言い方だったのかも知れない。何しろ、勘定は一定の様式に則って物事の大き

さを測り、以てその意味を知るといふ管理技術なのだから。と、以前にも考えた事がある気がする。「許す」はむしろ「緩す」と取りたい。

などのたまふままに(などを仰る内に)、いと苦しげにのみ見えまされば(衛門督はとても苦しさが増すばかりにお見えになって)、いみじうて(心痛な様子なので)、心の内に思ひ合はすることどもあれど(大将は内心では思い当たることもあったが)、さして確かには(そうかと言って如何と確かには)、えしも押し量らず(具体内容を推量できません)。

「いかなる御心の鬼にかは(あなたがどういふ良心の呵責をお持ちなのか)。さらに(父殿に於かれては、一向に)、さやうなる\*御けしきもなく(そのような御様子も無く)、かく重りたまへる\*由をも聞きおどろき嘆きたまふこと(あなたがこのように重体になっていらっしゃる近況報告を聞いて驚き悲しみなされること)、限りなうこそ口惜しがり申したまふめりしか(この上なく残念と仰っていたようでしたが)。 \*「御けしき」は普通「みけしき」と読みがあつて、此処でもローマ字文では mi-kesiki と示されているが、注には<「源氏物語絵巻」詞書に仮名表記で「おほむけしき」とある。「御けしき」を「おほむ--」と読む例。源氏の態度表情をさす。>とある。 \*「由(よし)」は<由来、理由>などの意を示すことが多いと思うが、此処では<伝聞由来の趣旨=近況報告>を意味するのだろう。

など、かく思ふことあるにては、今まで残いたまひつらむ(どうしてそのようなお気持ちがあつたのなら今まで黙っていたのですか)。こなたかなた明らめ申すべかりけるものを(私が仲を取り持ってどちらの言い分も納得出来るように申し開き出来ましたものを)。\*今はいふかひなしや(今からでも間に合いませんか) \*「今はいふかひなしや」は<今さらはどうしようもない>という意味に見える。源君はそう思っていたら、内心文なら正にそう言い換えて良いのだろう。実際、仲を取り持とうにも、この藤君の状態では詳しい話を聞く事も出来ない。それに、その相談事の内容が、以前から薄々感じていたことだが、源君が7年前の蹴鞠の日に覚えた藤君と姫宮との密通の危惧だとしたら、実は源君の手には負えない。そして、正にその事が問題ただけに、藤君はこの死ぬ間際になって、物理的に取り成す時間が無いことが、源君に殿と藤君との仲を取り成せないのは致し方ないという言い訳を成立させて、源君に負担を掛けずに時の解決を待てる事情が整ったので、やっと話す事ができた。つまり、話はもう終わっている。後は何を言っても、源君の弁も、藤君の弁も、事態を進展させる言葉に成り得ない。だから、何を言っても、何も言わなくても、同じ事、という面はある。が、それでも人は言葉を交わす。それが意味を持つかどうかは別にして、そういう言霊が飛び交う場面は、それ自体が風情、情緒として印象付く。此処でも、内心文ではなく、実際に相手に話し掛けているのだから、答えの無い事は承知の上だとしても、源君は藤君に<今からでも間に合わないのか、詳しい事情を話してくれ>という言い方をした、と読むのが正しい観劇姿勢に思える。

とて(と言って大将は)、取り返さまほしう悲しく思さる(今からでも取り成したく、この衛門督の重篤を悲しくお思いになります)。

「げに(確かに)、いささかも隙ありつる折(いくらか元気なうちに)、聞こえうけたまはるべうこそはべりけれ(ご相談申し上げるべきでした)。されど(でも)、いとかう今日明日としもやはと(こうも早く今日明日の限りになるとは)、みづからながら知らぬ命のほどを(我ながら知らなかった命の短さを)、\*思ひのどめはべりけるも\*はかなくなむ(気長に考えていたと言うのも、私の



人生の軽さを示しているのでしょう)。\*「思ひのどむ」は<悠長に考える>。\*「はかなし」は<弱々しい。たいしたことではない。>で、自分の運の無さを皮肉った言い方なのだろう。

このことは、さらに御心より漏らしたまふまじ(この話は決して他言無用に願いたい)。さるべきついではべらむ折には(よろしくお取り成し願える時のために)、御用意加へたまへとて(御承知置き願いたく)、聞こえおくになむ(申し上げたまでです)。

\*一条にものしたまふ宮(一条にお住まいの宮を)、ことに触れて訪らひきこえたまへ(何かとお見舞い申し上げて下さい)。心苦しきさまにて(未亡人暮らしが気掛かりだと)、院などにも聞こし召されたまはむを(朱雀院などにもお思いなさっていらっしゃるらしいので)、つくろひたまへ(面倒を見てください) \*「一条にものしたまふ宮」は妻である女二の宮のことらしい。女二の宮が一条に居を構えていたことは初見だ。

などのたまふ(などを衛門督は仰います)。言はまほしきことは多かるべけれど(他にも仰りたいことは多くありそうでしたが)、心地せむかたなくなり(気分がどうにも持ちこたえられなくなったので)、

「出でさせたまひね(もう帰って下さい)」

と、手かききこえたまふ(と手で人払いなさいます)。加持参る僧ども近う参り(祈祷を仕る僧たちが近付いてきて)、上、大臣などおはし集りて(母上と父大臣など御家族もお集まりになり)、人びとも立ち騒げば(女房たちも異変に立ち騒ぐので)、泣く泣く\*出でたまひぬ(大将は泣く泣くお帰りになりました)。\*「出づ」は部屋から出るのか、邸から出るのか。ただ、この場で直ちに臨終を見た、ということではなさそうなので、この日は一先ず源君は自邸に帰った、という文なのだろうと読んで置く。

[第四段 柏木、泡の消えるように死去]

\*女御をばさらにも聞こえず(同腹妹の弘徽殿女御はいうまでもなく)、\*この大将の御方などもいみじう嘆きたまふ(異腹妹の大将夫人なども、衛門督の重体を非常にお嘆きなさいます)。\*「女御をばさらにも聞こえず」の強調文型は<柏木と同腹の弘徽殿女御はいうまでもなく、異腹の雲居雁も、のニュアンス。>と注にある。確かにそうらしい。しかし、「女御」とだけ言って、これを<同腹の弘徽殿女御>だと読ませる神経は私には分からない。いや勿論、今の話題は衛門督の重篤に付いてであり、その舞台設定は藤原殿邸であり、そこで「女御」と言えば、正妻腹で冷泉帝に入内した弘徽殿女御を先ずは考える。が、今や代替わりして、一般的に「女御」と言えば今上帝の桐壺女御を、この物語では指す筈だ。だから、その紛らわしさを払拭するために、ある場面に於いて登場した人物の最初の場合では、何らかのそれと特定できる説明、例えば、御同胞の、とか、弘徽殿の、とかを付けるべきだ。そうだろうと思って、少し読み進んで、確かにそうだと分からせる書き方、というものは、そういう意図としてあるとは思いますが、この場合、と言っても既に是に似たようなことはこの物語には多々あるが、には、気を持たせる意味も効果もない。\*「この大将」は左大将源君だろうが、この「この」が分からない。校訂で別段に分けられていることを無視しても、この文は上文とは別の場面になっていると思うし、仮に同じ場面だとしても、他に比べるべきもう一人の大将など話題になっていないのに、特に「この」と指示する意図が分からない。となると、今の舞台は藤原家なので、其処で「この」と言えば<当家の婿養子の>という意味になって、右大将は藤原右家の人物が就いている事が前提で、その右大将も縁者として見舞いに来る、という事情を踏まえて、紛らわし

さを避ける言い方、のように見える。尤も、この書き方で十二分に紛らわしいが。ともあれ、それらしい記事が無いので全く不明だ。

心おきての(衛門督は気性が)、あまねく人の\*このかみ心にもものしたまひければ(誰にでも面倒見が良くいらしたので)、\*右の大殿の北の方も(右大臣夫人も)、この君をのみぞ(この藤君だけを)、睦まじきものに思ひきこえたまひければ(実の兄弟筋の中で親しく思い申しなさっていらしたので)、\*よろづに思ひ嘆きたまひて(ふと昔の文を懐かしく思い嘆きなさって)、御祈りなど取り分きてせさせたまひけれど(平癒祈願などを特別に上げさせなさったが)、\*やむ薬ならねば(お医者様でも草津の湯でも治らぬ恋の病ゆえ)、かひなきわざになむありける(いくら揉んでも貝はない)。 \*「このかみ」は<子の上(かみ)>で<兄弟姉妹の中で年長の者>と古語辞典にある。「このかみごころ」は<面倒見の良さ>あたりか。 \*「右の大殿の北の方」は源氏殿養女で藤原殿の実子で藤君の腹違いの、恐らくは姉に当たるかと思われる撫子だ。因みに、藤君 33 歳(推)、撫子 34 歳、弘徽殿女御 31 歳、源君 27 歳、右大臣 44 歳、藤原殿 54 歳(推)、母上 50 歳(推)、女三の宮 22 歳、女二の宮 24 歳、今上帝 22 歳、朱雀院 51 歳、源氏殿 48 歳。 \*「よろづに」は<何かにつけて>らしいが、撫子にとって藤君は実の姉とも知らずに懸想文を寄越した可愛い人であり、その文がちょっと洒落ていたのが印象に残っていたのだろう。 \*「やむ薬ならねば」は<我こそや見ぬ人恋ふる病すれ逢ふ日ならではやむ薬なし>(拾遺集恋一-六六五 読人しらず)が参照指摘されている。

女宮にも(夫人の女二の宮にも)、つひにえ対面しきこえたまはで(とうとうお会い申しなされずに)、\*泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ(衛門督は泡が消え入るように静かに亡くなりました)。 \*「泡の消え入るやう」は今でも普通に<はかないさま>を表わす言い方だ。「泡」は<すぐ消えるところから、はかないことのたとえ。>と大辞泉にもある。ところで、この言い回しについては<「水の泡の消えて憂き身といひながら流れてなほも頼まるかな」(古今集恋五-七九二 紀友則)>と参照指摘がある。ところが、この歌が少し面倒だ。例によって「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、この歌は一般に「水の泡の消えて憂き身といひながら」を「水の泡の消えて」「憂き身といひながら」と解釈することが多い、と解説されていて、実際に他の多くのサイトを見ても「消えて」という打消語で読んであって、それでも「古今和歌集の部屋」サイトの設上者は「消えて」と読む、と述べられている。確かに「消えて」は不快な響きだ。そこで、「千人万首」サイトの「紀友則」を参照すると、特に左遷経歴はないらしいが、四十代半ばまで無官だった、とあり、この人の時代に「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」の言い回しがあつたかどうか分からないが、水泡は多くの場合は含んだ空気を水自身の形態保持力である表面張力によって一時的に表面に留めているものであって、その保持力が然程は強く無いので泡は短時間で消滅することと、中身が空気なので泡が消えても水にも大気にも大きく作用しない、ということが「はかなさ」の意味を成すのだろうが、水も大気もそれを構成する個別の分子の立場みたいなものを考えてみると、浮かぶか沈むか張るか解けるか、は結構重大な局面なのかも知れない、というワケだ。というワケで、「水の泡の消えて憂き身といひながら」は、わざわざ六文字で「水の泡の」と詠み出しているのだから、「泡の」の「の」は補足を導く係助詞語用で<～というものの特性として>という言い方で、「消えて憂き身といひながら」が<身を捨てて浮かぶ憂き身というものようになったが←閑職で流浪する身だが>と不遇を「水泡」に例えている、と私は読んで置く。「流れてなほも頼まるかな」は明確な中央志向だろう。これを恋歌として読むなら、別れても好きな人、みたいな感じだ。で、この歌が藤君の死を形容するに相応しい引歌だという意味は、何処にあるのか。今さら「別れても好きな人」と宮を慕っても始まらない。やはり私には、「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」で御子の幸いを願うこと、くらいしか思い付かない。であれば、藤君はもはや何も語らず<静かに>死んだ、のだろう。

\*年ごろ(年来)、下の心こそねむごろに深くもなかりしか(衛門督は心底から女宮への愛情が深いものではなかったが)、大方には(大体の表向きには)、いとあらまほしくもてなしかしづききこえて(とても良好に持て成し仕え申し上げて)、\*気なつかしう(親切で)、心ばへをかしう(気が利いて)、うちとけぬさまにて過ぐいたまひければ(礼節を保って宮は過ごす事が出来たので)、つらき節もことになし(辛いことも特にありませんでした)。 \*「年ごろ」は注に<『完訳』は「以下、宮が柏木との結婚生活を回顧。柏木が心からは宮を愛さなかったが」と注す。>とある。女二の宮と衛門督との結婚は若菜下巻七章一段に書かれていて、具体的な描写はなかったが、「今の御世には、いと親しく思われて、いと時の人なり」と前振りがあったので、今上帝の即位後と思われ、であれば、ざっと二年前だ。 \*「けなつかし」は<懐かしい感じで=親切に>くらいか。

「ただ(やはり)、かく短かりける御身にて(これ程の御短命という運勢だったので)、あやしく(普通とは違って)なべての世すさまじう思ひたまへけるなりけり(世の全てを果敢無くお思いになってしまったのだろう)」

と思ひ出でたまふに(と衛門督を思い出しなさんと)、いみじうて(とても残念で)、思し入りたるさま(女宮が考え込みなさん様子)、いと心苦し(とても沈痛です)。

御息所も(宮の母御息所も)、「いみじう人笑へに口惜し(若くして未亡人となった不幸はとても世間体が悪く情けない)」と、見たてまつり嘆きたまふこと(と宮をご心配申し上げ嘆きなさんこと)、限りなし(この上ない)。

大臣、北の方などは、ましていはむかたなく(父大臣や母上の悲しみは、増して言うまでもなく)、

「我こそ先立たぬ(自分こそ死ねばよかった)。世のことわりなうつらいこと(子が先立つなど世の道理に反して辛いことだ)」

と焦がれたまへど(と衛門督を思い焦がれなさんが)、何のかひなし(どうにもなりません)。

\*尼宮は(尼となった女三の宮は)、おほけなき心もうたてのみ思されて(衛門督の大それた横恋慕を鬱陶しくばかりお思いになって)、世に長かれとしも思さざりしを(衛門督に長生きして欲しいともお思いではなかったが)、かくなむと聞きたまふは(亡くなったとお聞きになれば)、さすがにいとあはれなりかし(さすがにととても感傷的になりました)。 \*「尼宮」は出家した女三の宮のことらしい。初めての呼称だ。

「若君の御ことを(若君のお生まれを)、\*さぞと思ひたりしも(猫の夢で確信していると督が言っていたのも)、げに(実際に若君はお生まれになったのだから、確かに私と衛門督とは)、かかるべき\*契りにてや(そういう宿縁だったということ)、思ひのほか心憂きこともありけむ(勝手に懸想を募らせてとっていたが、宿縁であってみれば、私が思う以上に督は辛い思いをしていたのかも知れない)」と思し寄るに(と尼宮は藤君に思いを寄せてみなさんと)、\*さまざまもの心細うて(父親を亡くした若君の将来が何とも心細く思えて)、うち泣かれたまひぬ(思わずお泣きになりました)。 \*「さぞ」は<必ずそうなる>という確信、かとおもう。であれば、猫の夢の予言のことに

違くない。 \*「契りにてや〜心憂きこともありけむ」は理由提示の後に結論を述べる構文のようだ。しかし、この<宿縁だったから意外に辛いこともあっただろう>という言い方は、補語したように解釈しないと合理的な文に成らない、と私は思う。 \*「さまざまもの心細し」は宿縁に、即ち、宿縁で儲けた若君の行く末についての不安。